

# 探訪 北の風景 54

## 後期旧石器時代から縄文へ 檜山管内今金町「ピリカ遺跡」

青木 和弘

丘陵の斜面に牧草地が広がっている。旧石器時代（後期3万5000年前〜1万2000年前）の大規模な石器製作跡だという。檜山管内今金町の「ピリカ遺跡」だ。

1978年、ダム建設の際に発見した遺跡で、表土の下に堆積する厚さ1メートルほどの粘土層から、石器の移り変わりをたどることができると、石器の移り変わりをたどることができると、三層にわたる石器類が現れた。これまでに約20万点も出土しているが、日本で初めて旧石器時代のカンラン岩製ピーズが見つかり、石器からはシカの脂肪酸を検出するなど、当時の暮らしをうかがい知る貴重な成果が上がっている。ただ、これまで

発掘した面積は全体の1%に過ぎず、東西100メートル、南北200メートルの範囲に、まだ大量の石器や旧石器人からの様々なメッセージが眠っているはずだ。

旧石器人はピリカでどんな暮らしをしていたのだろう。氷河時代は寒冷で乾燥し、年平均気温が現在より8度も低かったという。森はアカエゾマツやグイマツなどの針葉樹で、草原にはマンモスやノウマンゾウ、ヘラジカ、バイソンなど北方の大型獣が草を食んでいたのだろうか。小高い丘から獲物を見張り、移動生活をしながら猟をしていたようだ。だからここでは、長さが15センチもあるような槍先に使う大きな石器をたくさん作っていた。動きの速い小動物を射る矢の鏃（やじり）が登場するのは縄文時代になってからのことだ。

アフリカで誕生した現代人の祖先は、世界各地へ拡散していくのだが、日本列島にたどり着く集団は4万年ほど前、後にオセアニア人となる集団から東アジアで分離した。分離した集団の1グループは、ヒマラヤ山脈の東側から北上して3万5000年ほど前、シベリアを経て日本列島にやって来たらしいということが、最近のゲノム解析で分かったという。

当時は氷河期で、北海道はユーラシア大陸と陸続きだった。移動するマンモスなどの群れを追いながら人々がやってきたようだ。もう1つのグルー

プは、東南アジアの海岸沿いを北上して、日本列島の南側からやって来た。その両者が縄文人の先祖に違いないというのだが、はっきり結論が出るのはまだ先のようなのだ。

氷河期が終わると湿潤で温暖な気候になり、森林が発達し、貝などの採集しやすい水産資源も豊富になる。大型獣が絶滅しても、狩猟・採集・漁労などを組み合わせた定住型の生活が定着し、竪穴式住居による集落が形成される。土器の出現は植物の実やタネの貯蔵に優れ、煮炊きが食生活を楽にしてくれる。日本列島の旧石器人は、長い年月をかけて適応し、縄文人になっていったようだ。

ぜひ立ち寄ってほしいのが、ピリカ旧石器文化館だ。重要文化財展示室の中でも見逃せないのが、白いメノウの槍先形尖頭器だ。長さが25センチも



原石を持ち込み、いろいろな道具を製作した石器製作跡の発掘現場を再現した施設が丘陵の上にある。凸部分の上に石器や破片がのっている





石器製造跡は東西1000m、南北200mあり、実際に発掘した面積は1%にすぎない。まだまだ多くの石器類や旧石器時代から現代人に残された貴重なメッセージが埋まっているのかもしれない



重要文化財展示室の石器類。中央左がメノウ製の槍先形尖頭器、中央右が長さ33センチの頁岩製の槍先形尖頭器。どちらも狩猟用以外の用途があったのではないかと考えられている

ある木の葉形で、1992年に米国のスミソニアン博物館で展示した際、「世界で最も美しい石器」と評されたものだ。しかし、メノウは美しいが硬すぎて加工には適さない。狩猟に使うのではなく、何か「精神性が込められた用途」があったのではないかと思われる。石器といえば、黒曜石がおなじみだが、この近くに産地がないため、普段の石器には同じ様に薄く割ることができない頁岩（けつがん）を使っている。道南には頁岩製の石器が多いのだ。

ピリカ遺跡まで札幌から約160キロだから車で3時間ほど。ピリカ旧石器文化館は4月にリニューアルオープンし、1年間は入館無料で見学できる。旧石器人に思いをさせ、秋のドライブはいかがだろうか。